齊藤　令介

　女親に男の子を教育させることは難しい。
　なぜならば、彼女たちは本能的に子供たちをかばおうとするからだ。
　例えば川。
　大多数の女親は、息子たちに、
　「危険だから、川のそばに行ってはいけません」と教えこむ。
　これはこれで正しい。
　息子が事故に遭う確率が激減するから。
　しかし、危険から故意に遠ざけられた男の子は、事故には遭わずにすむかもしれないが、自己の確立を妨害される。
　男の子が一人前の男になるためには、母親の保護本能を乗り越えなければならないのである。
　川は男の子にとって、これ以上のものはないと思えるほどの教育の場だ。
　魚やザリガニの獲り方、川の渡り方、泳ぎ方、
　危険な場所の見分け方、滑りやすい岩の上の歩き方・・・・・・。

　これらの貴重なトレーニング・メニューのすべてが、
　「川のそばに行ってはいけません」の一言で、少年たちから奪われてしまうのである。

そこで父親の息子に対する教育が必要になってくる。
息子の見ている前で率先して川に入り、あなたが子供のころ身に着けた遊びのノウハウを背中と体ですべて教えるのである。
それが息子に対する父親の務めであり、義務なのだ。

現代社会では、息子たちは父親の働く姿を見ることができない。
これは不幸なことだ。
子供に言葉ですべてを理解させることは難しい。
実際に目で見、手で触れ、体で体験できることを通じてしか、子供は物事を真に理解しない。

今、息子たちに必要なのは、父親の教えではないだろうか。
釣り糸の結び方、ボートの漕ぎ方、ナイフの扱い方・・・・・・。
父親に習った男の知識は、息子の生涯に一生ついていく。
この本は、あなたが少年時代に父親から習ったであろう、男として身につけておくべき技術のあれこれを集大成したものである。
父親となったあなたが、息子に教える場面にのぞんで、必ず役に立つ本である。
この本の中に登場する技術は、すべて私が身をもって体験し、最良と判断したものである。
学者や小説家、ライターが、また聞きをして書いたものとは、似て非なるものだ。

あなたがこの本によって、少年時代に父から学んだノウハウの数かずを、記憶の底から呼び戻し、それをあなたの息子に伝えることを願って。

『父と息子の教科書』

何かがずれて、どこかが狂っている、と、誰もが感じ始めている日本。
子供たちに少年たち、女たち、男たち、マスコミ、警察、政治、社会のどこもかしこも、何かがおかしい。
氾濫する情報、一体、どの情報を信じたらいいのか？　頭の中は押し寄せる情報が交差し、ただ流されストレスがたまっていく。
頭の中に多くの情報を抱えている人、すなわち知識人ほど複雑に考え、悩みや苦しみを多く持ってしまう。頭がよいゆえにいくとおりもの道を考え、そして、・・・・・オーバーヒート。

作家の村上龍もそうだった。
私と村上龍が初めて会ったのは一九八三年のことだった。そのとき彼は映画の失敗で落ち込んでいて、文章も書けない状態だった。そして悩み、苦しんでいた。そして働きたくないといった。
あまりに暗い顔をしているので、私は彼に質問をした。
「家族を食わす分は稼いでいるのか？」
彼はそのくらいは稼いでいると答えた。私は、
「お前は狩人だよ。だから餌（えさ）がある時は働きたくないのだ。農耕民族的資質を持つ男たちは毎日働かなければ安心しないけれど、狩人の血を持った男は餌があるかぎり働きたくなくなるのだよ」
そのように告げたとき、彼の顔は劇的に変わった。彼を覆っていた、平均的日本人的思考は、私の言葉によって飛び去ってしまったのだ。
その後、彼と私はカナダ極北の旅に出かけた。さらに彼は、私の北海道狩猟旅行にも同行し、私の原始思考法を身につけた。彼の顔は明るくなり、以後暗くなることはなかった。
原始思考法で考えていれば悩むほどのことではなかったのだが、

村上龍は日本人の大多数が持っている、「働く人、良い人。働かない人、悪い人」という、平均的な日本人の思考方法に影響され、悩んでいたのだ。彼はすっかり変わり、人生を楽しく生きるためにバリバリ働くようになった。

現代の仕事は、狩人にとっての獲物を得るための行動と同じ。獲物を得た後は遊ぶ。村上龍は、仕事と遊びとの関係を理解できるようになったのだ。彼は、こころおきなく遊べるようになり、快楽とは何であるのかがわかるようになったのである。そして私の思考方法を基に、『愛と幻想のファシズム』（講談社刊）を書き上げた。

それから私は、多くの人たちが村上龍と同じように悩んでいることを知った。その人たちは、私の原始思考法によって悩みを解決した。

ここで、原点に戻るための思考法を持つために本書を書く。独断と偏見という人もあろうが、あえてこの書を出す。どの項目も簡明に大事なことだけを述べている。読者によっては物足りなさを感じるかもしれないが、どのような複雑な問題も、根は原始的でシンプルなものなのである。

人間が本来持っている感覚、知覚、本能は、現在なおざりにされている。本当に人間はそんなに進歩したのだろうか。その答えは本書の中にある。

この本で紹介する原始思考法をあなたの体の中から思い出すことができれば、もう、あなたはストレスにさらされることなく情報に流されることもなくなり、おそるべき情報洪水の中でサバイバルできるのである。

『原始思考法』

約束され、制度化された権威。
そんなものは、父親にはない。
民主主義の中で家畜となった父親たちは、権威の失墜を嘆くが、そんなもの、制度にすがっても戻っては来ないのだ。

父親が尊敬されたのは、経済力ではなく、その情報であった。
昔、父親は、原野や森林や海や川や戦場や仕事場で得た、貴重な情報によって、家族からの尊敬を受けたのだ。
サラリーを運ぶだけの、家畜化した父親は、金属バットで殴り殺されて当然なのである。

狩猟。
それは、農耕が始まる前、何百万年と続いた父親達の最初の仕事だった。
男たちは、生命をかけて獲物を倒し、息子に、その情報と技術を伝えたのだ。
日本でただひとりの「自覚したハンター」、齊藤令介は、彼の持つあらゆる技術と情報を、本やコンピュータ・ディスクや映画からではなく、すべて、フィールド（猟場）から得た。
だからそれは、サバイバルの、生き残るための、情報と技術である。
そして、父親が息子に伝えるべきことは、まさにその技術と情報で、それは、自動販売機のようにコインを入れれば出てくるというものではない。

生き残るのは難しい。
息子たちにそのことを教えなくてはならない。

この本は、父親の、バイブルである。

『父と息子の教科書』の、村上龍による裏表紙文